

■最澄(伝教大師) さいちょう ・・・・・・・・ 767＝	僧。日本天台宗の開祖。比叡山は現在に至る日本仏教の変遷の原点となった。 近江国滋賀郡古市郷(現滋賀県大津市)に生まれる。父は三津首百枝。
宇佐八幡神託 769＝ 2歳：	
山部立太子・ 773＝ 6歳：	村里の小学に入り、陰陽・医方・工巧等を学ぶ。
・・・・・・・・ 776＝ 9歳：	
・・・・・・・・ 778＝11歳：	近江国分寺に入り、国師の行表の弟子となり、
蝦夷大反乱・ 780＝13歳：	国分寺僧の補欠として得度し、名を最澄と改めた。
桓武天皇即位 781＝14歳：	
長岡京造営始 784＝17歳：	
藤原種継暗殺 785＝18歳：	東大寺の戒壇で具足戒(小乗戒)を受けたが、世間の無常を感じ、突如として比叡山に登って草庵をかまえ、山林修行の生活に入った。
蝦夷征伐始・ 788＝21歳：	比叡山に一乗止観院(後の延暦寺)を建てる。 比叡山での修行中、多くの經典類を読破したが、なかでも天台の典籍を披閲したことが契機となり、最澄の運命を決定づけた。坐禅の際に「願文」を著す。
平安京遷都・ 794＝27歳：	ながく山にこもってきびしい禅行とたゆまない学行をつづけ、その名がようやく都の人士に知られるようになり、
田村麻呂將軍 797＝30歳：	*内供奉十禅师に任ぜられ、
清水寺・・・ 798＝31歳：	法華十講の法会を始める。
蝦夷地平定・ 801＝34歳：	南都の十大徳を招いて法華十講を行なう。
胆沢城設置・ 802＝35歳：	*和気広世の主催する高雄山寺(神護寺)法華会の講師に招かれ、斬新な講義の評判が天皇の耳にも達し、それが機縁で入唐求法の還学生(短期留学)に選ばれる。
・・・・・・・・ 803＝36歳：	藤原葛野麻呂を遣唐大使とする一行に加わり難波を出発するが、暴風雨に遭って挫折。九州に留まり、
最澄空海渡唐 804＝37歳：	門弟の義真を通訳に連れ、空海とおなじく遣唐使の船に乗って九州を出発し、明州に到着。まず天台山に登り、ついで湛然の高弟である道邃と行満について正統な天台教学の奥義をさずかった。また道邃からは大乘の菩薩戒を受け、口然から禅を、順曉から密教をそれぞれ相承している。
大事業中止・ 805＝38歳：	遣唐使とともに帰国の途につき、上京した。在唐わずか8ヵ月ながら、書写したり持ちかえった經典類は230部460巻をかぞえ、収穫は大きかった。帰国した当時、桓武天皇は病床にあって、すぐさま宮中に召され、天皇の病氣平癒を祈っている。
桓武天皇没・ 806＝39歳：	*最澄の上表にもとづき、南都六宗に準じて、天台業を学ぶもの2人(止観業1人、遮那業1人)の得度が年分度者のなかに加えられた。ここに日本の天台宗が開立する。桓武天皇が崩御すると、最大の外護者を失った最澄とその新生の教団はやや沈滞期に入る。空海との親密な交わりが結ばれたのはこのころである。最澄は、7年下の空海に辞を低くして、空海が持ちかえった多量の經典のうち、真言、悉曇(梵字)、華嚴に関するものを借りうけ、あるいは書写して研究した。
薬子の変・・・ 810＝43歳：	
・・・・・・・・ 812＝45歳：	弟子の泰範、円澄、光定らを率いて高雄山寺におもむき、空海より灌頂を受けている。ところが、
・・・・・・・・ 813＝46歳：	最澄が弟子を空海のもとに遣わし、真言に関する書籍を借りようとしたところ、空海は、最澄と自分との間に教学的な立場上こえることのできない溝のあることを述べ、最澄の懇請をきっぱりと拒絶し、二人の交情は急速に悪化し始めた。ことに最澄が最も嚮望していた愛弟子の泰範が空海のもとへ走るに及び、空海を尊敬しながらも決別しなければならなかった。
・・・・・・・・ 815＝48歳：	和気氏の要請で大安寺において講説し、南都の学僧と激しく論争したが、それより東国へ旅立ち、伝道を展開した。会津にいた法相宗の学僧徳一との間に、三一権実の論争が始まる。
・・・・・・・・ 817＝50歳：	「照権実鏡」を書いて反駁。論争は最澄が比叡山へもどった後も続き、「法華去惑」「守護国界章」「決権実論」「法華秀句」などを著述し、徳一の主張をことごとく論破している。
文華秀麗集・ 818＝51歳：	「山家学生式」を定め、天台宗の年分度者は比叡山において大乘戒を受けて菩薩僧となり、12年間山中で修行することを義務づけた。「守護国界章」を著す。
金剛峰寺・・・ 819＝52歳：	これに対して南都の僧綱は猛然と反論したが、最澄は「顕戒論」を執筆し、「内証仏法血脈譜」を書いて、自己の見解の正統性を説いている。
満濃池・・・ 821＝54歳：	「法華秀句」を著す(三一権実論争の終結)。
最澄没・・・ 822＝55歳：	だが最澄の念願はその生存中には実現せず、比叡山の中道院で、没した。